

## 中国の2014年度国防予算について

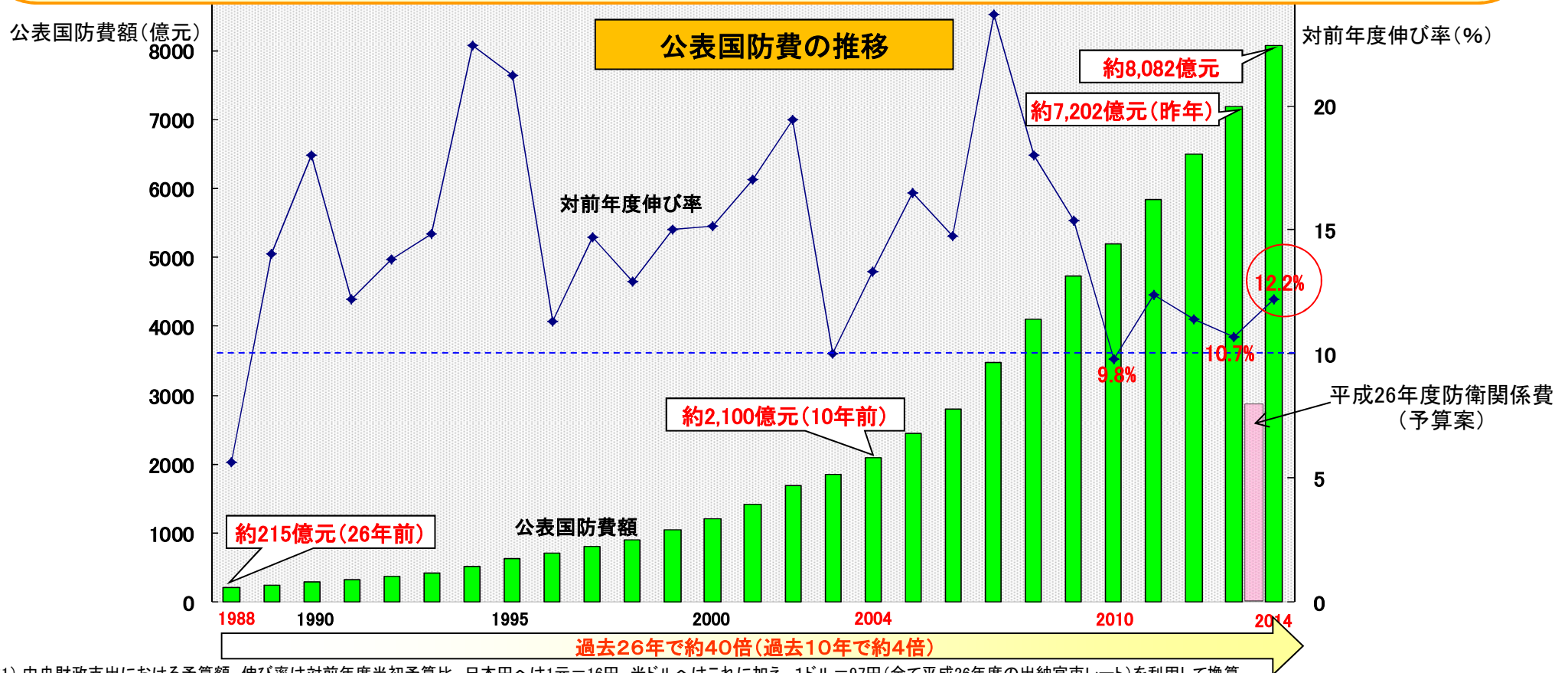
○ 3月5日、中国は、第12期全国人民代表大会第2回会議において、2014年度の国防予算を発表【公表の概要】

・ 予算額は **8,082.3億元** (対前年度比: **12.2%増**)

※円換算: **約12兆9,317億円** (注1) = 我が国の平成26年度予算案における防衛関係費の **約2.7倍** (注2)

※ドル換算: **約1,333億ドル** = 米国の2015年度国防予算(国防省要求額、暫定値)の **約1/4** (注3)

➡ 中国の公表する国防費には、外国からの兵器調達等の費用が含まれておらず、**実際の国防費は公表額の約1.3~2倍**との指摘(米国防省報告書)があることに要留意



(注1) 中央財政支出における予算額。伸び率は対前年度当初予算比。日本円へは1元=16円、米ドルへはこれに加え、1ドル=97円(全て平成26年度の出納官吏レート)を利用して換算

(注2) 4兆7,838億円(SACO関係経費及び米軍再編関係経費のうち地元負担軽減分を除いた額) (注3) 5,750億ドル(出典:米国防省資料)

## 中国の国防予算の透明性と使途について

- 中国は、今回の発表でも予算の内訳等詳細について一切公表せず（昨年発表された国防白書においても、テーマを主に運用に絞ったこともあり、国防予算に関する記述は一切なし）
  - 予算の説明としては、2010年度版国防白書等において、①人員生活費、②活動維持費、③装備費に3分類し、それぞれの総額と概括的な使途を公表するのみ
- ➡ 中国の軍事・安全保障に関する透明性の欠如の現れ

※ なお、同日（3月5日）の李克強総理による政府活動報告において、海洋強国の建設に言及するとともに、国防建設について以下に言及

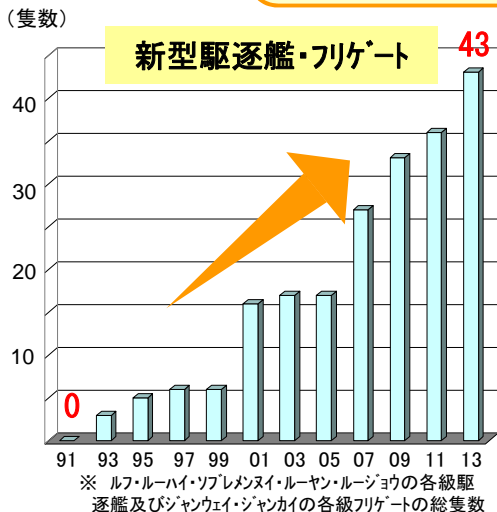
- ・ 情報化条件下における軍隊の抑止力と実戦能力の向上
- ・ 平時における戦闘への備えと国境・領海・領空防衛の管理・コントロールの強化

- 米 국무省報道官は、「引き続き中国に対し、能力及び意図に関する透明性を向上するよう促していく」と発言（3月5日）

# 中国の海・空戦力の近代化

## 海上戦力

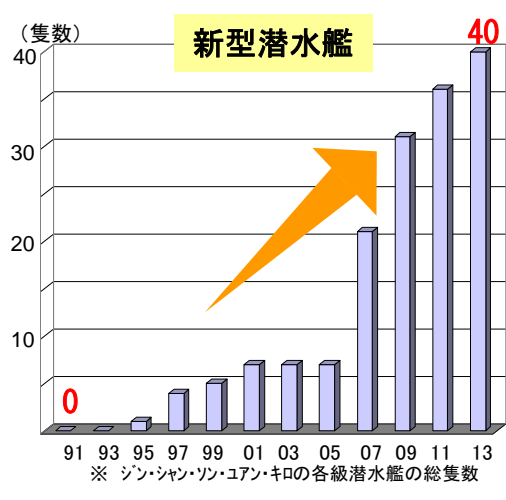
- より遠方の海域において作戦を遂行する能力の構築
- 水上艦艇、潜水艦、揚陸艦など海軍戦力全体の能力向上、戦略ミサイル原潜の更新
- 中国初の空母「遼寧」が2012年9月に就役



排水量: 8,067t(満載)  
初就役: 1999年  
備考: ロシアから計4隻購入。SS-N-22超音速対艦ミサイル(射程160~240km)を装備



排水量: 3,963t(満載)  
初就役: 2008年  
備考: ステルス性を考慮した最新フリゲート艦。VLSを採用。現在も増産中とみられている



排水量: 3,125t  
初就役: 1994年  
備考: ロシアから計12隻購入。静粛性に優れる。5番艦以降は巡航ミサイルSS-N-27(射程220km)を装備



排水量: 59,439t(満載)  
初就役: 2012年  
備考: 国産の艦載戦闘機「J-15」を開発中との指摘



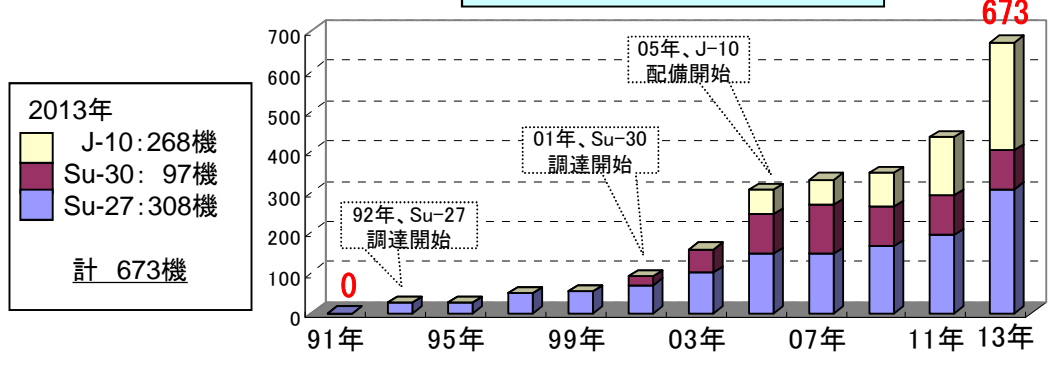
排水量: 不明(※3,000tと推定されている)  
初就役: 2006年  
備考: 最新鋭の国産ディーゼル潜水艦。AIP(非大気依存推進)技術を採用しているとされ、現在も増産中

(隻数はミリタリーバランス各年版、諸元はJane's Fighting Ships 2012等)

## 航空戦力

- 国土防空型から攻防兼備型に転換、第4世代戦闘機が着実に増加
- 次世代ステルス戦闘機とされる「J-20」等を開発中との指摘
- 空中給油機、早期警戒管制機、輸送機を含む多種多様な航空機の自国での開発・生産・配備

### 第4世代戦闘機機数推移



J-10戦闘機



中国国産の戦闘機。イスラエルのレム戦闘機(80年代後半に開発中止)に酷似。現在、量産態勢

Su-27(J-11)戦闘機



ロシアからの輸入(Su-27)及びライセンス生産(J-11A)に加え、独自に再設計した機体(J-11B)を生産

次世代戦闘機とされる「J-20」



2011年1月、飛行試験を初めて実施。元前米国防長官は「中国はステルス性能を備えた次世代戦闘機を2020年までに50機、25年までに200機程度配備する可能性がある」と発言

(機数はミリタリーバランス各年版、機体の概要はJane's All the World Aircraft 2013等)

# 中国の核・弾道ミサイル戦力の近代化

## 近代化方針

### 第二砲兵

- 即応能力、防御突破能力、精密打撃能力、総合的破壊力、防衛能力、残存能力の向上
- 戦略的抑止力・防衛作戦能力の向上

### 海軍

- 戦略的抑止力・反撃能力の増強

(「2010年中国の国防」)

## 核・弾道ミサイル戦力の近代化努力

### 即応性・残存性の向上

- 液体燃料から固体燃料化  
⇒液体燃料よりも小型で車載化しやすく即時発射可
- 固定式から車載化(移動式化)  
⇒発見・破壊されにくく、任意地点で発射可能
- 新型SLBMと新型SSBNの開発  
⇒残存性の高い戦略核戦力

### 打撃力の向上

- 弾頭の小型化、複数化、個別誘導多弾頭(MIRV)化  
⇒同時複数目標攻撃が可能に。ミサイル防衛に対抗
- 誘導制御技術の導入  
(終末誘導機動弾頭(MaRV)の装備など)  
⇒精度の高い攻撃が可能に

## 弾道ミサイルの種類・性能

種類	大陸間弾道ミサイル		中距離弾道ミサイル			短距離弾道ミサイル		潜水艦発射弾道ミサイル	
	DF-5 シリーズ	DF-31 シリーズ	DF-4	DF-3 シリーズ	DF-21 シリーズ	DF-15 シリーズ	DF-11 シリーズ	JL-1 シリーズ	JL-2
推進方式	液体燃料	固体燃料	液体燃料	液体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料
射程(km)	12,000 ~13,000	8,000 ~14,000	4,750	2,400 ~2,800	1,750 ~2,500	600-900	280-350	2,150 ~2,500	8,000
ミサイル(基)	50-75		5-20		75-100	1,100以上		-	(開発中)

(Jane's Strategic Weapon Systems、米国防省「中華人民共和国の軍事及び安全保障の進展に関する年次報告」2012・13年版)



DF-31A大陸間弾道ミサイル



DF-21C中距離弾道ミサイル

# 対艦弾道ミサイル及び巡航ミサイル

## 「アクセス拒否／エリア拒否 (A2/AD: Anti-Access/Area-Denial)」

- 中国は、台湾有事の際に、**米国を含む第三者の介入を阻止・拒否するための方策**を検討中。このため、西太平洋域内に派遣・運用される部隊を、**長射程で攻撃する能力の向上**を継続
- 現在及び将来の戦力構成の向上により、中国軍は、**敵の水上艦艇を遠方から攻撃可能**となる



### <特に注目される兵器>

- **対艦弾道ミサイル** (ASBM: Anti-Ship Ballistic Missile)
  - ・ 中国は**DF-21を基にした命中精度の高い通常弾頭の弾道ミサイル**を保有
  - ・ 特に、空母などの洋上の艦艇を攻撃するための**通常弾頭の対艦攻撃弾道ミサイル**も**配備している**との指摘もある

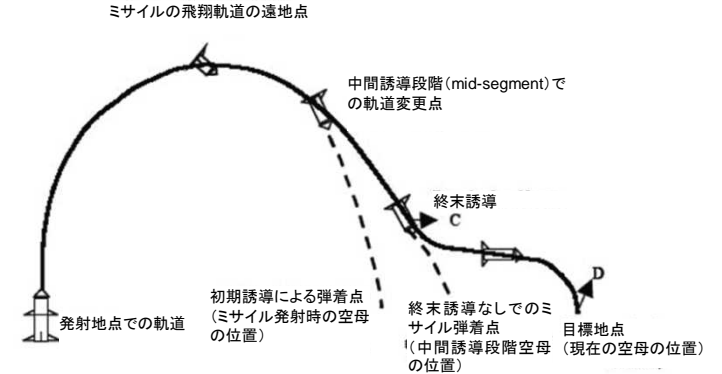
○陳炳徳・総参謀長「DF-21Dについては、まだ研究開発段階にある」(2011.7.11)  
 ○2011年台湾国防白書「DF-21Dは、2010年に少量が生産され配備されている」(2011.7.19)  
 ○2013年国防省報告書「DF-21Dを含む中距離弾道ミサイルを配備している」(2013.5.6)

### ● 巡航ミサイル

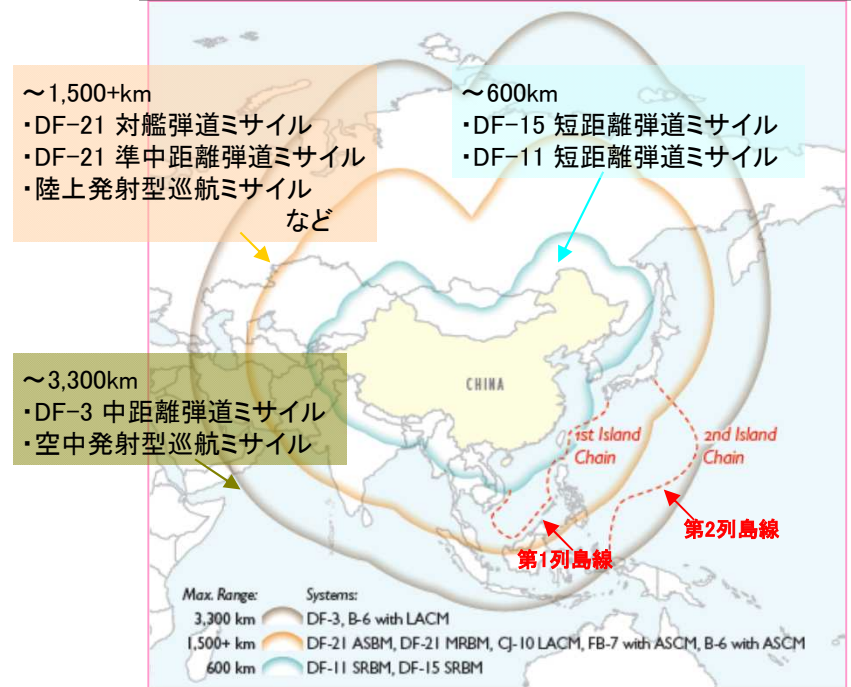
- ・ 中国は**射程1,500km以上の巡航ミサイル(DH-10(CJ-10))**を保有
- ・ 弾道ミサイル戦力を補完し、我が国を含むアジア太平洋地域を射程に収める戦力となる可能性
- ・ さらに、**巡航ミサイルを搭載可能な中距離爆撃機も百数十機保有**

名称	巡航ミサイル DH-10(CJ-10)
外観	
配備数	200~500 基
射程	1,500~2,000km (陸上発射型)
弾頭	核、高性能爆薬、子弹

## 対空母攻撃における**対艦弾道ミサイル**の誘導 (人民解放軍第2砲兵工程学院の記事より抜粋)



## 通常戦力による介入対抗戦力



(出典:平成22、23年防衛白書、Jane's Strategic Weapon System、米国防省「中華人民共和国の軍事・安全保障の進展に関する年次報告」(2012年版))